

三、慈悲門

一、論註の文に云く

「二者依慈悲門、抜一切衆生苦。遠離無安衆生心故。抜苦曰慈、与樂曰悲。依慈故抜一切衆生苦。依悲故遠離無安衆生心」

菩薩が慈悲門を成ずるのは、一切衆生の苦を抜かんと欲するが為である。しかるに、若し一切衆生の苦を抜かんとすれば、無安衆生心を遠離しなければならぬ。

無安衆生心とは、我心貪著自身が外、即ち他に向かったものである。内に我あるものは、他の衆生をして、不安を感じしめ、安らかならしめざる心を持つのである。されば、外にあつては、無安衆生心、内にあつては、我心貪著自身と、同一の我が二つの相となるのである。真実の智慧に於いて、慈悲は必然であるが故に、智慧門は次に慈悲門と共にあるのである。この慈悲門に隨順せんとするところの能依能順の心相を、遠離無安衆生心と云うのである。

一、抜苦与樂。

「抜苦を慈と曰い、与樂を悲と曰う。慈に依るが故に、一切衆生の苦を抜き、悲に依るが故に、無安衆生心を遠離す。」

この抜苦与樂ということについて、南本涅槃經十四梵行品には、

「為諸衆生除無利養是名大慈……………抜苦

欲為衆生無量利樂是名大悲」……………与樂

この涅槃經の説は、論註と同じく、抜苦を大慈と云い、与樂を大悲としてある。しかるに、抜苦を大悲となし、与樂を大慈となす説も亦用いられている。諸經論中、心地觀經、智度論二十七、十地論二、俱舍論二十九、終南の般舟讚等、皆抜苦を大悲、与樂を大慈とせられている。かくの如く相反するかに見ゆる二説がもちいられるのは、二字互いに相通するが故である。今は但、本論の文義に順ずる便宜に依られたものである。

一、第二慈悲門は、第一門の、不求自樂、遠離我心等の智慧門に孕まれているし、無安衆生心を遠離して、衆生の上に抜苦与樂しようとする慈悲門には、第一の自身住持の樂を求めざる智慧門が孕まれている。即ち慈悲(利他)は、帰依(自利)に於いて必然であるし、帰依は、利他の慈悲によつて如実となるのである。而して、慈悲門に於いて、抜一切衆生苦と云うことと、遠離無安衆生心ということと、二つのことを成就せんとするかに見えるが、この抜苦と、遠離無安衆生心とは、一体の慈悲の両面である。即ち、対他的に云えば、抜苦であるが、対自的に表現すれば、遠離無安衆生心である。されば鸞師はこれを積して、抜苦曰慈、与樂曰悲と云い、慈によるが故に抜一切衆生苦と云い、悲によるが故に遠離無安衆生心と言われる。されば慈とは衆生の苦を抜かんとする心であり、悲とは衆生に樂を与えんとする心であるが故に、無安衆生心を遠離するのである。しかるに、遠離無安衆生心は、そのまま遠離我心貪著自身の外への現れであるが故に、ここにも慈悲門は、智慧門に孕まれていることが示され

てある。依智故不求自樂ものでなければ他の衆生に対する、離苦与樂の慈悲が生ずる所以はあり得ない。智慧は、真理に向かう正しい態度であると共に、正しき生活実践の態度であった。正しき生活実践の態度とは、衆生の度すべきを知って、自受用樂の地に安住せんと欲する所の退墮より己を守ることであった。これ即ち慈悲によつて衆生を救わんが為ではないか。